

# ワーズワスにおけるフランス革命の受容

田 中 宏\*

## (1)

ワーズワスは1790年に学年試験を済ませ、友人の Robert Jones と、フランスのカレー (Calais) に渡ったのは7月13日であった。翌14日にはバステューユの陥落の一周年を記念して、パリを中心に全国連盟祭 (Fédération Fête) が行われていた。ワーズワスとジョーンズはその後10月19日に帰国するまでフランス、イタリア、ドイツを旅行している。そして翌年1791年11月6日には、ワーズワスは Brighton から船出し、再びフランスに渡り、Blois、Orleans を経由して、パリから翌年1792年11月末に帰国するまで、約一年間フランスに滞在することになる。この滞在中にワーズワスが感じ、経験したことが後の作品、*The Prelude*、*The Borderers*、*Descriptive Sketches* など書き記されている。今回私は *The Prelude* によって、ワーズワスの考えをたどってみたいと思う。

ワーズワスが1790年、最初にフランスに着いて革命に沸き立つ民衆の息吹を感じた時の思いを、次のように述べている。

時まさに、ヨーロッパ全土が歓喜に沸き立ち、  
フランスは幸福の絶頂にあり、人間は  
生まれ変わるかのように見えた時期だったのだ。

---

\*元人文学部教授、立命館大学名誉教授—英文学 (イギリス・ロマン派の詩)

すでに述べたように、アルプスを目指して出発したわれわれは、  
ちょうど、あの大祭日の前夜にカレーに上陸するという  
巡り合わせになった。そしてこんな貧弱な都会の  
たとえわずかな人々の間にも、一人の歓びが、  
同時に何千万の人々の歓びでもあるとき、一体人間はどんなに顔を  
輝かせるものかをまのあたり見ることができた。<sup>1</sup>

二度目つまり 1791 年 11 月にフランスに渡ったワーズワスが、Orleans の  
町を歩いた時の印象を、次のように述べている。

私はこれらの激動する衝撃を  
あまり感じることなく、ほとんど平静で、  
あらゆる灌木も喬木も、國中至る所で根元から大揺れに  
ゆれているのに、温室の中にガラス張りにされた草花か、  
客間に飾られた植物のように無頓着だった。  
このような無関心さは奇妙に思われるかもしれないが、  
実際、それは何一つ必要な予備知識もなくて、  
いきなり劇場に飛び込んでみたら、もう舞台は  
はるかに進行している劇の展開で忙しかった。<sup>2</sup>

最初ワーズワスは夜会やトランプ遊びや、町の特権階級の人々が出かける  
格式張った会合の席に通ったりするが、そのうちにヴァロン兄妹に紹介され、  
妹の Annette Vallon と恋仲になる。ワーズワスは帰国後、Annette Vallon  
との結婚実現のため努力したようであるが、英仏間が交戦状態になるとか、  
家族の反対に遭うとかの事情で、ついに結婚を断念するに至る。*The Prelude*  
では、このことは全く述べられていない。ただし、9 巻の最後に、ウオード  
ラクールとジュリア (Vaudracour and Julia) の恋物語という形で語られて  
いる。その後、G M. Harper や Emile Legouis らの研究が世に紹介された結  
果、このウオードラクールの物語の重要な部分は、ワーズワス自身の経験に

基づいて書かれていると今日では考えられている。今回はその話は割愛する。

## (2)

Nicholas Roeによると、ワーズワスに革命思想の面で主として影響を与えた人物は、Godwin と Beupuy と Gregoire の 3 名ということであるが、Beupuy について少し説明をしよう。彼はワーズワスがフランスに渡ってからつき合った青年将校の一人で、もともと貴族出身であり、母方はモンテニューの子孫であったが、18 世紀啓蒙思想を受け、革命思想にも共鳴するようになるが、貴族の仲間は革命思想に真っ向から反対の立場にあるので、仲間からさげすまれるようになる。この Beupuy の人柄について、次のように描写されている。

さきほどの、あの将校たちの群れのなかに一人、  
すでにちょっと触れたように、タイプの違った将校がいた。  
彼は共和主義者であり、したがって、他の連中からはのけ者にされ、  
東洋で階級の違うものに対するように、  
ひどく嫌われ、軽蔑されていた。彼ほど優しく、  
穏和な人は、今までこの世に存在しなかったほどで、  
優しくはあっても、高らかな理想に対しては、  
この上なく情熱を燃やした人だった。人々の侮蔑を受けて、  
彼は一層寛大な人になっていった。あの頃の彼の性格は、  
まるで、踏み碎かれる時に高く芳香を放つ、  
アルプスの草原に咲く草花のように、  
きわだってその甘美な魅力を放っていた。<sup>3</sup>

そしてワーズワスとボビュイは次のようなことを語り合ったのであった。

## (3)

われわれはもっとも重要な問題を加えた。

すなわち、人間と神の賜物であり、  
神自身の力のうちにある人間の崇高な性質について、  
そして人間の盲目的な欲望と、明晰な真理の把握を可能にする  
人間の着実な能力について語り合い、前者は人間の束縛をうち破り、  
後者は、ひろくゆきわたり減びることのない知識を通じて、  
社会生活をできるだけ規律正しいものにして、  
賢人や善人において見られるような、純粹で、  
個性的なものにすることによって、自由を  
確固とした基盤の上に築こうとするのだ。  
またわれわれはあの古代の物語のなかの数々の誉れ高い行為を  
呼び起こし、すべての記録された時代に見いだされる  
輝かしい時点を思い浮かべて、守り抜かれた真理と、  
過ぎ去った過ちとを考え、また、  
天上の炎をとらえるような誠実な精神について、そして  
その炎に一般大衆がどのような燃料を補給し、  
それをあおりたてるのか、また党派が  
どれほど熱心に、習慣や言語や国と、  
愛や憎しみの、あらゆる障害を乗り越えながら、  
それぞれどんな妥当な性格を身につけようかと努力しているか、また  
彼らが教義のために、何をし、どれほどの苦難をなめているか、  
彼らがいかに遠く旅をし、いかに長期間、苦しみに耐えているのか、  
それから偉大な国家が、最も小さい国から、  
どれほどすばやく形成されたか、またどのように新しい意見によって  
一致団結し、ばらばらだった部族が一体となり、  
大空の雲のように広く広がったかを考えた。  
それからわれわれは、自分たち自身の抱負についても  
訴えた。そして最後に以上述べてきたすべての事柄の  
生きた証拠を、実に明けの明星のようにさわやかに

決起した国民のうちに見たのだ。われわれは興奮して、  
彼らの美点を見、ひどく粗野な民衆のうちにも、  
この上なく堅固な自己犠牲と、博愛心、  
克己の精神、そしてあの最も激烈な戦いのさなかに、  
最高の正義感を見たのだ。<sup>4</sup>

ワーズワスがポピュイとつき合うなかでつづいていく革命思想への思いが、エピソードを交え、次のように語られている。

しかし、それに劣らず、  
一人の意志が、万人にとっての法律となるような絶対的支配を憎悪し、  
また不当な特権によって、国王と民衆の間に割り込み、  
民衆の味方ではなく、国王の味方になる人々の持つ、  
あの不毛な思い上がりへの憎しみが、  
日毎に、私に強い支配力を持つようになってきて、哀れみと  
愛とに混じり合うのだった。というのはあの惨めな大衆への  
希望があるところには、彼らへの愛があるだろうから。こんな時に、  
われわれはある日、飢えに悩む一人の少女に出会った。  
彼女は腕に巻き付けた綱により、自分のもの憂い体を  
牝牛の動きに合わせ、のろのろと歩み、  
小道で食べ物を拾っていた。  
一方、彼女は天涯孤独の気の抜けた様子で、  
両手を忙しく動かし編み物をしていた。  
この光景を見て、私の友人は  
興奮して叫んだ。「あのためなのだよ、  
われわれが戦っているのは」と。そして私も  
彼と共に真剣に信じたのだ。すなわち、  
もはや何人も抵抗できない一つの精神が、  
すでに広く広がっており、少なくとも

こうした貧困はまもなく見られなくなるだろうし、  
やがてこの大地も、勤勉に働く人々や、あくせく働く  
貧しい子どもに十分報いる本来の意志を妨げられることなく、  
差別待遇を法律化するすべての慣習は、  
今後、永久に消滅するだろうと。<sup>5</sup>

### （3）

ワーズワスがフランスに滞在している間にも、フランス革命は進行してゆき、ついに1792年9月2—6日に3,000人以上の王党派が、パリの群衆に虐殺されるという惨劇が起こる。このいわゆる September Massacres は前川俊一氏の説明によると次のとおりである。

当時、パリに結成されていた Commune (革命政府) は、国民義勇軍の国境向け進発を前にして、「外敵に向って進軍するのに、その妻子を殺害する恐れのある悪徒を後に残さないよう」王党の陰謀派を捕えて処刑しようとしたが、群衆心理の赴くところ、ついに常軌を逸し、王党には何の関係もない窃盗犯人や、懲役人、はては女子供を収容した養老院や、感化院までも襲撃して、数千人の人々を殺戮するに至った。Wordsworth がパリについたとき、この事件が起こってからまだ2カ月とはたっていなかった。<sup>6</sup>(革命政府) は筆者。

この September Massacres を直接に目撃しなかったにしても、ワーズワスは次のような声が聞こえるような気がしたのだった。

歳月は移り、潮は再びもとに戻り、  
日も巡り、万物皆再生し、  
地震も決して一度では済まないものだ。

### （6）

そのように私は次第に興奮してゆき、  
街全体に向かって、「もはや眠りはあるまいぞ」と叫ぶ  
一つの声が聞こえてくるような気がした。<sup>7</sup>

そしてワーズワスはまたルーヴェが街頭でロベスピエールの罪状を告発しているのを目撃する。その時ワーズワスは次のような思いに打たれ、心の動揺を覚える。

次に述べたいことは、今や国民の自由も、  
生命も死も、この国のはるか遠い隅に至るまでも、  
やがては今この首都を掌握している人々の、  
裁決一つに委ねられることになるだろう  
ということをいくらか自分の目で眺めて……<sup>8</sup>

そしてワーズワス自身はそんな不安や、「自国語でさえも弁舌の才にも恵まれず、動乱や策謀にも不向きで」あったにもかかわらず、この革命の「偉大な大義のためにたとえどんな危険がともなおうと、その時喜んで奉仕に従事しようと、覚悟をきめたものだ」と *The Prelude* (X、132-37) のなかで述べている。

このように革命思想に目覚めたのであったが、ワーズワスは異郷での生活資金に欠乏し、1792年11月末に帰国することになる。しかし、もしそのままフランスに留まっていれば、おそらくあの露と消えた人々と共に共同戦線を張り、ワーズワス自身も命を失ったであろう可能性が極めて高い当時の状況であった。

ワーズワスが帰国してまもなく、1793年2月1日、フランスはイギリス、オランダに宣戦布告をし、イギリスも10日後に、フランスに宣戦布告をする。穏健派ジロンド党の考えに共鳴していたワーズワスは、まさに身の置き所のない思いをする。この時の状況が次のように述べられている。

ついに今や、イギリスの兵力は連合軍との  
同盟に組み入れられ、この時から  
私一人の心の中だけではなく、当時のすべての  
純真な若者の心の内に、変化と衰退とを  
見るようになった。まさにこの瞬間まで、  
私は一度も、道義性に対する衝撃というものを  
経験したことがなかった。今度の場合を除いて、  
それまでに精神革命とでも言えるような感情の  
衰退と、その転換を経験したことがなかった。

.....

事実わがイギリスの指導者たちが初めから、  
生まれ変わったフランスを、どれほど不愉快なまなざしで、  
眺めていたかはまぎれもないことだし、私もまた、  
こうした日が来ることを疑ってはいなかった。  
しかし私はそう考えながらも、ただ全体的に  
成り行きに関心があるだけだったので、それ以上に  
事件そのものを、何かと予想することもなかった。  
ところが今度は別の仕事を持つことになった。というのは、  
私は自分の心の中にこの上なく不自然な争いの  
傷跡を感じたのだ。それが私の喜びのすべての心優しい喜びの泉に、  
敵意を抱く重荷のようにのしかかった。

.....

後になってみれば、まことに記するも大変つらい真実であるが、  
何千人ものイギリス兵士がうち負かされ、  
栄光もなく戦場に取り残され、あるいは追いやられ、  
勇敢な戦士たちが屈辱的な撤退を余儀なくされた時など、  
自分の魂は勝ち誇り、喜んだものだ。それは悲しみであった。  
いな、悲しみというべきでなく、それどころではなく、  
実に名状しがたい感情の葛藤だった。それは例えば、私と同じように

あの村の教会の尖塔の姿を愛する人だけが、推察し得るだろうが、  
会衆のなかにあつて、全員が天の偉大な父に向かって  
額ずき、祈りを捧げ、あるいは祖国の勝利への  
賛美が行われている最中に、その素朴な礼拝者たちのなかに、  
たまたま私だけが、そこに座っていることが許されない、  
招かれざる客のようであり、しかもさらに言えば、  
いずれ訪れるはずの復讐の日を思って、心を慰めていたのだ。<sup>9</sup>

革命を賛美したはずのワーズワスであったが、1792年9月の大虐殺を見聞きしてからは、彼の心に何か名状しがたいものが生まれてくる気持ちが次のように語られている。

おお友よ、あの時の

私の昼間の思いは、この上なく憂鬱であり、また夜の夢の  
何と悲惨なことだったろう。あの残虐行為の最後の一撃が  
あってから、ずっと後になつても、来る月も、来る年も、  
(君にだけは、内緒話のようにありのままの真実をうち明けるのだが)  
ほとんど一夜として、安らかな眠りの得られた日はなく、  
私はぞっとするような絶望的な幻を持った。そして  
独裁政治、処刑の道具、あるいは夢のなかでさえ、  
あの不正の法廷の前で、声をふりしぼって弁護した長い演説、  
頭は混乱し、果ては、最も神聖な所であるはずの  
私自身の魂の奥底で、自分が同志を裏切り、彼らを見捨てているという感じさえ持ったのだった。<sup>10</sup>

またワーズワスはこの革命の意味を次のように受け止めている。

なお私はあの理解し難い懲罰の恐怖のなかにあつて、  
力強い一種の共感、すなわち、私の心のなかに

盛り上がってくる、ある内的衝動を覚えた。しかし、それは確かに最高の事物と関連を持つものであった。あのすさまじい嵐の中でも聞こえるような、耳をろうする音楽が、あの恐るべき事件のなかに鳴り響いていた。その時、私の心に次のような真実が受け入れられるようになった。つまりこの地がもたらすもっとも痛切な悲しみのもとで、またわれわれのあるいは同胞の、この上ない辛い悲しみのもとで、そうした苦悩を味わっても、どこかにもしその苦悩がなければ、決して得られなかったような自尊心、すなわち信念と、精神の高揚と尊厳が生まれなければ、また新しい力が与えられなければ、あるいは古い力が回復されなければ、それは自然の罪ではなく、われわれ人間の責任だと言うことが。また革命を嘲る人々が得意になって、「人民政府と平等ということから、われわれの刈り取った収穫を見よ」と言って嘲笑することがあっても、悲しむべき事態を引き起こしたのは、人民政府でも、平等のせいでもなく、また誤った哲学によって接ぎ木をされた粗野な信念のせいでもなく、いわば、罪と無知の貯水池が、長い年月の間にすっかりいっぱいになって、ついにそのいまわしい重荷を支えきれず、あふれ出して洪水となって、国中に氾濫したようなものと私は見ていた。<sup>11</sup>

さて、ワーズワスの帰国後、1794年、7月28日に、ロベスピエールが処刑されたとのニュースが耳に届く。ワーズワスはこの報せを聞いて、次のように言う。

私の心の喜びは大きく、このように明らかにされた、

復讐と永遠の正義を見て、私の歓喜は大きかった。  
「来たれ、黄金時代よ、」  
私は広々とした砂原に向かって、大きく息をはずませながら、  
勝利の歌を口ずさんだ。「夜のとばりから  
朝が姿を現すように、汝、黄金時代よ、来たれ。  
われわれの信頼はこのように証明されたのだ。  
見よ、みっともない自暴自棄の行為により、  
血の川をもたらし、血の川の力による以外に、  
オージ阿斯王の牛舎を清める道はないと、唱えていた  
連中は、今や彼ら自身の助っ人の力によって一掃されたのだ。」<sup>12</sup>

ここではロベスピエールの改革のやり方が、ギリシャ神話に出てくるオージ阿斯王の牛舎が三千頭の牛を飼い、30年間一度も掃除がされなかったが、ヘラクレスの力で一日で、清掃されたことに例えられている。helper(助っ人)とはギロチンのことを指しているようである。

一方、英国内では小 Pitt が政権を掌握していたが、この young Pitt に対して、ワーズワスは批判の矛先を向けている。

われらの牧羊者たち（これは名のみで）は、当時、  
法律という保護者の持つ曲がり杖を、殺人の道具にしようと  
やっきになっていた。国家を支配していた人々は、  
死の種を蒔くものは、死あるいはもっと悪いものを刈り取り、  
もっと良いものは、何物も得られないという恐ろしい証拠を、  
目の前にしながら子どものように、  
巨人の不信心な所だけを真似しようとし、  
それを避けようとする賢明さを持たなかった。  
彼らは武器や卑劣な戦争において、まるで  
手の届かぬところに行動をする害虫のように、  
相手の信義を裏切ってまでも、同盟を結び、

正義を傷つけ、自由の息の根を止めようとしたのだ。<sup>13</sup>

Jonathan Wordsworth が注をつけた *The Prelude* のなかで、1797 年当時、Home Office の要人の一人、Walsh がオールホクスデン（Alfoxden）でのワーズワスやコールリッジの行動を、フランスのスパイ容疑で探るために、派遣されていたと書かれている。

次はワーズワスが、革命を起こそうとした人々の人間性を信じようとした態度が伺われる詩句である。

私は他の若者のように、人間性という一つの盾の  
黄金の側面から近づき、私の見た  
金属の性質を証明するためには、  
死を賭しても戦ったであろう。  
個々の人間の最善の物としては、情熱において賢明で、  
力において崇高、また家庭的愛情において、  
強く純粋なもの、さらに小さな社会においては慈悲深く、  
大きな社会においては、重大な出来事が召集されれば、  
偉大な働きをする。そうしたことは私も多少は  
知っていたが、深く実感をしていたものの、  
理性的に完全には理解していなかった。  
否、それどころか、そんな人間の特質も  
後に学ぶ理由がようやく分かったが、  
時代の害悪に耐えるものとならず、  
その聖域の入り口で留まっているだけで、  
内部で安全にいるわけではなかった。<sup>14</sup>

この箇所は、ワーズワスは最初人間性の良き面（黄金）に絶対的信頼をおくはずであったが、フランス革命の進行とともに、その良き面は「時代のもたらす害毒によって耐えられなかった」とワーズワスも認めているように、

彼の信頼は裏切られたことをここで告白しているのである。また Havens も、*The Mind of a Poet* のなかで、この点に関し、次のように述べている。

ワーズワスの人生に対する理想的な考えは、理性に基づく確信ではなく、感情的なものであった。というのは悪に関して、彼は通常の状態に対しては十分であるような、一般的知識しか持ち合わせていなかった。そして早晩、辛い目に遭うことになる、火の試練によって無傷ではありえなかったのである。<sup>15</sup>

フランスがイギリス、オランダに宣戦布告をしたと述べたが、後、「共和国の軍隊は1794年9月からジュルダンの指揮の下にルール川を渡り（10月2日）、ライン川の左岸の地方を占領し、マインツを攻め、北方軍はオランダを攻めて占領し、1795年1月にバタヴィア共和国を宣言させた」<sup>16</sup> のである。

この事情について、*The Prelude* のなかで、次のように述べられている。

さて今度は自分から圧制者となったフランス人たちは  
自己防衛の戦いを侵略戦争に切り替え、それまで  
目標にして懸命に努力してきたものを、すべて  
見失ってしまった。こうして、自由をのせた秤は、  
天と地の見守るなかで、公然と重力を失い、  
はねあがってしまった。私は自由の運命を読みとり、  
内心、いくぶん悩みを抱き、事実、悲嘆にくれた。  
しかし、狼狽したり、偽りの予言者の恥辱を  
身に感じることはなかった。しかし奮い立った私は  
これまでの主義にうち込み、その資質を試すために、  
一層その主義をひきしめ、働かせ、熱中した  
議論のなかで、意見は日に日に結論に成長し、  
ついにそれはあたかもその生命であるかのように、  
しっかりと私の心から離れなくなった。

世の中すべての物事が急速に悪化して行きつつあり、  
人間の希望を、彼の感情から分離し、それ以後は、  
より純粋な要素に永久に固定することを約束する  
哲学が喜んで受け入れられる時代であった。  
そこでは情熱に燃えたものが入って、自分自身を  
活気づける魅力ある領域であった。  
またそこでは、情熱は大いに活躍する特権を持っていたが、  
情熱という言葉が口にされることのない領域であった。  
しかし、もっと好意的に語るなら、その夢は  
極端を好み、人間の理性の裸の自己を  
自己の情熱の対象とするものを好む、  
若い純粋な心に少なからず訴えたのだ。<sup>17</sup>

この哲学とは、前川俊一氏の説明によると、Godwin の説を指すと考えた学者は、Legouis、de Selincourt、Garrod など従来の学者であった。Godwin の『政治的正義』*An Inquiry Concerning Political Justice* は、1793年2月16日に出版されている。「情熱が口にされることのない」というのはワーズワスの皮肉であって、「その言葉の裏には、感情を全く超越した純粋の思考の世界などあろうはずはなく、その思索を押し進める原動力として、熱情が大きな役割を演じているといった考えが、ひそんでいるのであろう」<sup>18</sup> と前川俊一氏は解説をしている。

ワーズワスはまた革命の根本思想を次のように要約する。

何という喜びだろう。

何という栄光か。自己を知り、自制をして  
世界のすべてのはかなさを洞察して、  
また過去の弱きものを形作っている、  
性質や時間や場所という偶然的なものを、

断固たる支配力で振り落とし、  
社会の自由をその唯一の基盤である、  
個人の精神の自由の上にうち立てること、  
その個人の自由は、一般法則の盲目的抑制より優越して、  
独立の知性の上に輝く  
環境の光を、威厳をもって  
唯一の道しるべとして選ぶのだ。<sup>19</sup>

すなわち、ワーズワスによれば、社会の自由はつまるところ、個人の精神の自由より成り立つのである。また個人の精神は前川俊一氏の説明を借りれば、「自分一個人の知性の自主的な判断力を唯一のよりどころにして、……その置かれた環境に応じて個々独立に判定を下し、過去の経験の集成として形成され、物事の判断の基準にされているところの一般法則の教えには、一切耳を貸さない態度」<sup>20</sup>なのである。

#### (4)

さてワーズワスは革命を支持する確信を持てず、絶望のなかで道徳的問題を放棄しようとした時、心の支えを模索する様子を次のように語っている。

このように私は  
あらゆる情熱も観念も、いろいろな形の信念も、  
被告人のように法廷に引き出し、  
疑いながら精神を呼び出して、  
白日の下にその資格と名誉を立証しようとした。  
ある時は信じながら、またある時は  
信じられなくなり、衝動、動機、善悪、道徳的義務の  
根拠について、また規則とはなにか、処罰とはなにかと考え、

果てしなく思い惑い、ついに  
あらゆることに証拠を求め、  
それを追求しながら、私は  
確信の感情を見失い、ついに、  
病的となり、矛盾に疲れ果て、  
絶望のなかに、道徳的問題を放棄した。  
そして、私は将来の探求として、  
数学を自分の探求能力の使い道に選び、  
その明晰な確実な証拠に、心に向けたのだ。<sup>21</sup>

引用 21 の最後の点について、J. Wordsworth、Abrams、S. Gill の注による *The Prelude* において、「フランス革命に対するワーズワスの信頼が崩れたとき、ワーズワスが必要とした支えを、Godwinism が提供できなかったので、ワーズワスは客観的確かさを与えてくれそうなものとして、数学の方へ心に向けたのだ」<sup>22</sup> と解説されている。また de Selincourt も「ワーズワスの絶望は、Godwinism が彼の本性を満足させてくれないと知った、必然的結果である疑惑と幻滅から来ている」<sup>23</sup> と述べている。

最後にワーズワスはフランス革命の混乱のなかで、危うく自分を見失おうとしたが、よき友と、人生のよき道づれを発見したと、次のように述べる。

ああ、この上なく大切な友である君が、この時に私に初めて  
紹介され、私の魂を律するための、力強い救いの手をさしのべて  
くれたのは、その頃であった。またその頃、  
あの愛しい女性の見守るなかに、月日が過ぎ、  
さびしい道を横切って流れる小川のように、彼女は  
突然、助言の言葉で語りかけるかと思うと、  
どこへ行っても、その姿が見られ、声が聞かれ、  
道の曲がり角でとらえられ、長い道のりを、  
決して離れない道づれとして、私のため、

私の本来の自己との、救いの交わりを持続させてくれた。  
というのは、多く私は傷つき、変わったように見えたが、  
私は雲に隠された月や、欠けて行く月よりも、変化を受けなかったから。  
彼女はすべての時において、私を詩人として維持してくれ、  
詩人の名の下に、この地上での私の務めを全うさせ、  
それ以外に目を向けないようにしてくれた。  
そして最後に自然自身が、人間の愛の手を借りて、  
あの物憂い迷路を通じて、  
私を明るいい日差しに導いてくれ、  
私に幼き日の感情を回復させてくれ、  
私に平和に満ち、広がり、決して乱されることのない、  
力と知識を与えてくれた。それは  
現代の衰退の過程を通じて、  
この時代のすべての墮落のなかにあっても、  
私を支え、大惨事のなかにあっても、今日でも私を支える。<sup>24</sup>

言うまでもなく、「大切な友」とはコールリッジのことであり、「愛しい女性」とは妹ドロシーのことである。この引用はフランス革命に対するワーズワスのメッセージであり、新しい人生の出発点への展望でもと思われる。ここでワーズワスがフランス革命を、「墮落」「大惨事」と呼んでいるところに、革命主義者になりきれなかったワーズワスの本音が出ているように思われる。しかし、フランス革命をかいま見たことは、その後のワーズワスの世界観、人生観に、コペルニクスの展開をもたらしたと思われる。たとえ、詩人として自然と共に歩もうと決心したとしても、単なる自然詩人ではなかったはずである。

## （注）

1. William Wordsworth, *The Prelude*, ed. by E. de Selincourt, Second Edition (Oxford, 1968) VI, 352-60.
2. *The Prelude*, IX, 85-94.
3. *The Prelude*, IX, 293-304.
4. *The Prelude*, IX, 361-95.
5. *The Prelude*, IX, 502-27.
6. *The Prelude*, with notes by Shunichi Maekawa vol. II (Kenkyusha, 1971) pp. 106-7.
7. *The Prelude*, X, 72-77.
8. *The Prelude*, X, 107-11.
9. *The Prelude*, X, 230-75.
10. *The Prelude*, X, 369-81.
11. *The Prelude*, X, 415-40.
12. *The Prelude*, X, 540-50.
13. *The Prelude*, X, 646-57.
14. *The Prelude*, X, 662-79.
15. Raymond Dexter Havens, *The Mind of a Poet*, vol. 2, (Baltimore The Johns Hopkins Press 1967) p. 534.
16. 『ワーズワス・序曲』岡三郎訳（国文社 1991）554 頁。
17. *The Prelude*, X, 792-819.
18. Shunichi Maekawa, *Op. cit.*, p. 153.
19. *The Prelude*, X, 819-30.
20. Shunichi Maekawa, *Op. cit.*, p. 154.
21. *The Prelude*. X, 889-905.
22. William Wordsworth, *The Prelude* 1799, 1805, 1850 ed. by Jonathan Wordsworth, M. H. Abrams, Stephen Gill (W. W. Norton & Company 1850) p. 408.
23. *The Prelude*. Notes, p. 605.
24. *The Prelude*, X, 905-931.

*The Prelude* の翻訳に関し、『ワーズワス・序曲』（岡三郎訳、国文社）および、『プレリュード序曲Ⅰ、Ⅱ』（野坂穰訳、地平社）を一部引用させて頂いたことを記する。

（2003 年 4 月 22 日 受理）